

平成 22 年度（第 54 回）  
岩手県教育研究発表会資料

外国語活動／外国語

# 中学校英語科における知識・技能の活用を 図ることをねらいとした問題の作成

平成 23 年 2 月 18 日  
岩手県立総合教育センター  
長期研修生  
所属校 奥州市立水沢中学校  
村 上 花 恵

## 目 次

I	研究の目的	1
II	研究の方向性	1
III	研究の内容と方法	1
IV	研究結果の分析と考察	1
1	「活用問題」の作成に関する基本的な考え方	1
(1)	本県における基礎・基本の定着について	1
(2)	「活用問題」とは	2
(3)	「活用問題」を作成する意義	2
2	中学校英語科における「活用問題」の作成に関する基本的な考え方	2
(1)	中学校英語科における「活用」のとらえ	2
(2)	中学校英語科における「活用問題」とは	2
(3)	中学校英語科における「活用問題」を作成する意義	3
3	中学校英語科における「活用問題」の作成	4
(1)	中学校英語科における「活用問題」の構成と作成上の留意点	4
(2)	中学校英語科における「活用問題」の利用に当たって	7
4	中学校英語科における「活用問題」の作成に関するまとめ	7
V	研究のまとめ	7

<おわりに>

【引用文献】

【参考文献】

## I 研究の目的

本県の義務教育では、「全ての児童生徒一人一人に基礎・基本の定着を実現していく」ことを目標としており、基礎・基本の定着については、論理的に物事を思考したり、表現したりすることなど、基礎的・基本的な知識・技能の習得に留まるものではないことを確認している。

この目標の実現のためには、基礎的・基本的な知識・技能の活用を図る学習活動を意識した授業展開を行い、授業や家庭学習においても論理的に物事を思考したり、判断したりすることをねらいとした問題に意図的に取り組ませていくことが必要である。

この研究は、中学校英語科における基礎的・基本的な知識・技能の活用を図ることをねらいとした問題（以下「活用問題」と表記）を作成し、提示することを通して、生徒への基礎・基本の定着を支援しようとするものである。

## II 研究の方向性

授業や家庭学習などで、基礎的・基本的な知識・技能を活用することにさらに習熟を図るため、中学校英語科における「活用問題」を作成する。

## III 研究の内容と方法

- 1 「活用問題」の作成に関する基本的な考え方(文献法)
- 2 中学校英語科における「活用問題」の作成に関する基本的な考え方(文献法)
- 3 中学校英語科における「活用問題」の作成(文献法)
- 4 中学校英語科における「活用問題」の作成に関するまとめ

## IV 研究結果の分析と考察

### 1 「活用問題」の作成に関する基本的な考え方

#### (1) 本県における基礎・基本の定着について

本県の義務教育の学力向上の目標は、「全ての児童生徒一人一人に基礎・基本の定着を実現していく」ことである。

基礎・基本の定着とは、単に読み・書き・計算といった学習基盤や各教科における基礎的・基本的な知識や技能の習得に留まるものではなく、論理的に物事を思考したり、適切に判断したり、表現したりするなど習得した知識や技能を活用させることを通して、基礎・基本を身に付けさせることである。

平成 20 年度には岩手県教育委員会が「『活用』に関する指導資料」を作成し、平成 21 年度には岩手県立総合教育センターで「知識・技能の活用を図る学習活動に関する指導展開例の作成」と題して研究成果をまとめ、本県の教育課題である「活用」に関する指導の方向性を示した。

その中で、「活用」を意識した授業とは、知識・技能を活用することが目的ではなく、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるとともに、それらを活用する学習活動を手立てとして、思考力、判断力、表現力等を育成することを目的とした授業であり、基礎・基本の定着を実現するためには、知識・技能の活用を図る学習活動を意図的に位置付けた単元構想に基づいた授業実践が求められていることが示された。

(2) 「活用問題」とは

「活用問題」とは、学習指導要領を基に、知識・技能を活用して、思考力、判断力、表現力等を育むことを目的とした問題である。

そのために、「活用問題」は、必要な情報を取り出したり、根拠を持って考えたり、自分の考えを説明したりするなどの言語活動に取り組めるよう構成している。

(3) 「活用問題」を作成する意義

「活用問題」は、「『活用』に関する指導資料」（岩手県教育委員会，2008）や「知識・技能の活用を図る学習活動に関する指導展開例」（岩手県立総合教育センター，2009）で示された「活用」を意識した授業を展開しながら、知識・技能の活用への習熟を図るために利用することを想定している。

生徒は、授業や家庭学習などで「活用問題」に繰り返し取り組み、様々な形式の問題を解くことを通して、知識・技能を活用することに習熟していく。また問題の「正答例と解説」を通して、知識・技能を活用する手立てを確認したり、活用したりすることで確かな習得がなされる。

また教師は、生徒の解答状況から、それまでの授業について「習得・活用・探究」の学習活動のバランスはどうであったか、言語活動をどのように授業に位置付けてきたかといった視点で授業実践を振り返ることによって、授業改善につなげることができる。

これらのことから「活用問題」への取組を通して、生徒への「基礎・基本」の定着を支援することができるものであり、「活用問題」を作成することは意義があると考えられる。

## 2 中学校英語科における「活用問題」の作成に関する基本的な考え方

(1) 中学校英語科における「活用」のとらえ

中学校英語科においては、英語を運用して行われる言語活動そのものを「活用」ととらえる。「『活用』に関する指導資料」（岩手県教育委員会，2008）では、このことを次のように述べている。

「実際のコミュニケーションを目的として英語を運用すること」を英語科における「活用」ととらえています。これは、外国語科の目標である「コミュニケーション能力の育成」を端的に言い表したものです。（一部抜粋）

(2) 中学校英語科における「活用問題」とは

学習指導要領では、コミュニケーション能力を育成するための手立てとして、「4技能の総合的・統合的な育成」，「場面や状況に合った適切な表現の選択」，「互いの気持ちや考えを伝え合う活動」をキーワードとして言語活動の充実を求めている。英語科の「活用問題」は、これらのキーワードを意識した言語活動に、問題という形式で取り組むことを可能にしたものである。

生徒は「活用問題」を解くために、身近な言語の使用場面の中で、既習事項を用いて、「聞く」，「話す」，「読む」及び「書く」の4技能を統合的に活用しながら課題を解決していく。その過程で、様々なテキスト（文章，絵，写真，図表，グラフなど）から情報を読み取り，その情報を目的に合わせて選択・整理する。そして場面や状況に合った適切な表現を選択し，事実や自分の気持ちなどが正しく伝わるように英語で表現する。「活用問題」はこれら一連の活動を通して，生徒の英語運用能力を高めるとともに，英語を用いてコミュニケーションを図るために必要な思考力・判断力・表現力等を育むことをねらいとしている。

### (3) 中学校英語科における「活用問題」を作成する意義

#### ア 言語活動の充実との関わりから

学習指導要領では、言語活動を充実させるために、各領域とも言語活動の指導事項が再編成され、【資料1】で示す指導事項が追加・改編された。これらの指導事項は、これまでの調査等を通してそれぞれの領域で課題と考えられることに対応したものであり、本県における課題とも一致していることが、学習定着度状況調査の結果等から明らかになっている。

#### 【資料1】言語活動の指導事項の追加・改編項目

- |        |  |
|--------|--|
| ア 聞くこと | (オ) まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること。   |
| イ 話すこと | (オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。  |
| ウ 読むこと | (オ) 話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること。                                |
| エ 書くこと | (エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。<br>(オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。 |

中学校学習指導要領解説外国語編（2008）より一部抜粋

「活用問題」は【資料1】に関連する内容を中心に作成されている。既習事項を用いて、「聞く」、「話す」、「読む」及び「書く」の4技能を統合的に活用する「活用問題」を利用し、各領域の課題と考えられる言語活動に繰り返し取り組ませることは、言語活動の充実を図るために意義のあることと考える。

#### イ 「習得」と「活用」の双方向の指導から

学習指導要領では、言語活動の充実を図るためのポイントとして、自分の考えや気持ちを伝え合う活動の重要性と合わせて、理解や定着のための練習が不可欠であるという点もあげている。平田(2008)は、言語活動の取り扱いについて「使用の中で理解させ、さらに使用させる」という使用中心の双方向の指導が求められていると解説している。「活用問題」を利用することを通して、習得の学習活動（理解や定着のための練習）と活用の学習活動（自分の考えや気持ちを伝え合う活動）の双方向的な指導が可能となる。

「活用問題」に取り組む過程で生徒は、習得が不十分な知識・技能があるために課題を解決できないことに気づく。そのため、授業の言語活動に対する目的意識が高まったり、家庭学習の内容が具体的で充実したものになったりと、「活用」を通して生徒の意識が再び「習得」に向かう。また、更に習得した知識・技能を活用することでより充実した言語活動を行うことができる。

一方教師は、生徒の解答や取組の様子から知識・技能の習得状況や活用状況を見取ることができる。その結果を受け、「習得」と「活用」という視点で自分の授業実践を振り返ることで授業改善を行うことができる。また、授業の一斉指導の中では難しい定着状況の異なる生徒への個別指導も、「活用問題」の事後指導の中で行うことができる。具体的には、教師の添削指導などを通して、表現の質を高めるアドバイスをしたり、定着していない文法事項の指導を行ったりすることなどで、個々の生徒が抱える異なった課題に対応した指導が可能になる。

生徒にとっても教師にとっても、「活用問題」を通して「習得」と「活用」を行き来しながら学習を深めていくことは、基礎・基本の定着を支援する上で意義のあることと考える。

### 3 中学校英語科における「活用問題」の作成

#### (1) 中学校英語科における「活用問題」の構成と作成上の留意点

##### ア 単元に沿った問題の作成

英語科の「活用問題」は、各学年とも教科書の単元ごとに問題を作成し、実施時期の目安を単元名で示した。中心となる言語材料が明確となるため、どの段階でどの問題が利用できるかがわかりやすく、「活用問題」を計画的・継続的に使用することが可能となっている。

各問題は、中心となる言語材料を用いる必然性のある場面設定の中で、中心となる言語材料に複数の既習事項を組み合わせ、4技能を統合的に活用しながら課題を解決する内容となっており、「活用問題」に繰り返し取り組むことで一つの言語材料を様々な形で何度も活用できるよう配慮している。

##### イ 言語活動のプロセスをふまえた問題の構成

生徒が英語の知識・技能を活用して言語活動を行う場合の学習活動を、本研究では、「場面や状況の把握」、「情報の取り出し」、「情報の整理」、「英語での表現」の四段階のプロセスとしてとらえた。これは、高木(2009)が、PISA型「読解力」を「受信→思考→発信」の学習活動としてとらえていることを参考にしたものである。繰り返しこの言語活動のプロセスをたどることで「活用」への習熟が図られるものと考え、原則として、5頁【資料2】で示すように、一つ一つの問題を言語活動のプロセスに沿って構成している。生徒は問題に取り組むことで自然にこの言語活動のプロセスをたどることができる。

また、Speaking Plusのように各学年を通して系統性のある単元や、「読むこと」に特化したLet's Read、「書くこと」に特化したWriting Plusなどの問題については、一つのテーマで各学年に同じ形式の問題を作成したり、テキストと設問を一体化させたりと、その特性を生かした構成及び内容となっている。

##### ウ 問題作成上の留意点

###### (ア) 目標タイム

解答に要する時間の目安を「目標タイム」として問題に表示した。言語の運用においては、適切な速度で言語を処理する力も必要である。しかし、解答に要する時間は、学年や学習状況、また個々の生徒によっても異なるため、実態に応じて、目標タイムを設定せずに取り組ませる、目標タイムを変更するなどの配慮が必要である。

###### (イ) テキスト

情報を取り出すためのテキストは、文章・絵・写真・図表・グラフなど様々な形式を用い、複数のテキストを関連させて思考する問題も意図的に作成した。英文テキストも、対話文・説明文・雑誌の記事・パンフレットなど多様な内容を取り上げ、その単元の言語材料を中心に既習事項と注釈付きの未習語で構成した。語彙や文の長さなどは学年や生徒の学習段階を考慮し、分量はその単元全体の英語の語数を目安とした。

### 言語活動のプロセス

1 場面や状況の把握

- 場面：英語の授業
- 状況：スミス先生の家族の写真を見ながら、みんなで先生に質問している。

2 情報の取り出し

- 写真から：家族構成、名前など
- 対話文から：家族それぞれの年齢、職業、住んでいるところ、趣味など

3 情報の整理

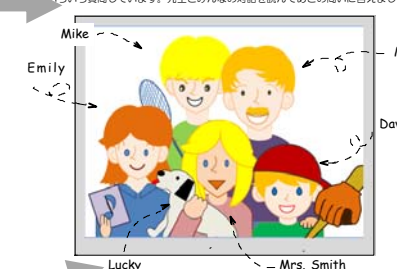
- 家族のそれぞれの情報を一覧表に書き込み整理する。
- Davidについてどのような情報が必要かを判断し、他の家族についての情報や、写真から読み取った情報などを参考にしながら、予想を立てて質問を考える。

4 英語での表現

- Davidについて、必要な情報を得るための質問をする。
- 一般動詞の疑問文とbe動詞の疑問文を使い分け、代名詞の使用などを考えながら質問する。

### 問題の構成

タイトル  
問題文



テキスト

生徒1 : How many \*children do you have?  
**Mr. Smith** : I have three children. This is Emily. This is Mike. And this is David.  
 生徒2 : Does Mike play tennis?  
**Mr. Smith** : No, he doesn't. He plays badminton. He is a very good player.  
 生徒2 : Is he a high school student?  
**Mr. Smith** : Yes, he is. He speaks Japanese very well.  
 生徒3 : Is Emily a high school student, too?  
**Mr. Smith** : No, she's not. She is a teacher. She lives in America.  
 生徒4 : What does she teach?  
**Mr. Smith** : She teaches music. She plays the piano very well.  
 生徒5 : Does Mrs. Smith have a dog?  
**Mr. Smith** : Yes, she does. She likes animals.  
 生徒6 : What animal does she like \*the best?  
**Mr. Smith** : She likes dogs the best.

\* children 子ども（複数形）  
 \* the best 一番

設問1

上の表を完成させるために、あなたもクラスみんなに続いて、デイビッド (David) のことについてスミス先生に質問してみましょう。質問は3つ以上考えましょう。

名前・年齢	職業など	住んでいるところ	好きなもの、得意なことなど
Mr. Smith (47)	中学校の先生 (英語)	日本	ギター演奏 キャンプが趣味
Mrs. Smith (45)	主婦	日本	①
Emily (23)	学校の先生 ②( )	③	④
Mike (17)	高校生	日本	⑤
David ( )			

① \_\_\_\_\_  
 ② \_\_\_\_\_  
 ③ \_\_\_\_\_  
 ④ \_\_\_\_\_  
 ⑤ \_\_\_\_\_

Class \_\_\_\_ No. \_\_\_\_ Name \_\_\_\_\_

設問2

エ 正答例と解説について

それぞれの問題について生徒向けに「正答例と解説」を作成した。生徒の自己採点や、教師の事後指導に役立てることを意識し、基本的に6頁【資料3】に示すように、以下の四つの部分で構成している。

「問題を解くために」では、言語活動のプロセスを、問題の内容に沿った具体的な解答の手順と

して示した。生徒が自己採点を行う際に、正解か不正解かを確認するだけでなく、正答を導き出すための方策として言語活動のプロセスを意識することができるよう、最初にこの項目を位置づけた。

「正答例」には、選択肢のある設問では正答を示し、自分の気持ちや考えを書くなどの表現の選択の幅が大きい設問については、いくつかの模範解答を示すことで正答例とした。自分の解答が正しいかどうかを確認するだけでなく、他の正答例を通して様々な表現に触れることでも知識・技能の活用の仕方を学ぶことができるように配慮した。

「解説」では、生徒が自分の解答を英語としての正しさだけでなく、「活用」の視点から見直すことができるよう配慮した。具体的には、情報の取り出し方、取り出した情報の整理の仕方、場面や状況に合った表現を選択するポイントなどについてテキスト等に沿って説明している。また「習得」と「活用」の双方向性の視点から、知識・技能の習得の学習に戻る手立ても示した。文法的な解説は別枠で囲み、教科書の単元を示すことで生徒が復習に取り組みやすいよう配慮した。

「STEP UP」は、すでに模範解答に近い表現ができる生徒や、興味・関心の高い生徒の学習意欲に応える部分である。テキストの情報の中で、既習事項だけでは表現しきれなかった部分を英語にしたものや、応用的な表現などを例示している。また、「スピーチのポイント」のように場面や状況に合った適切で効果的な英語運用の仕方等も提示している。

【資料3】正答例と解説の例（第1学年）

### 7 スミス先生の家族 正答例と解説

問題を解くために	
<p><b>1</b> ① 誰のことを話題にしている部分なのかに注意して会話文を読む ② 読み取った情報が表のどの欄に当てはまるか整理する</p> <p><b>2</b> ① 何のことについて質問するか、表の項目などを参考にして決める ② 写真、会話文、表の情報などを参考に、具体的な質問の内容や英文を考える</p>	
<p><b>1 正答例</b></p> <p>①・動物が好き ・動物の中でも犬が一番好き</p> <p>②・音楽</p> <p>③・アメリカ</p> <p>④・ピアノが上手</p> <p>⑤・バドミントンが上手 ・日本語を上手に話す</p> <p><b>2</b></p> <p>&lt;年齢をたずねる&gt; ・How old is David (he)? ・Is he <u>thirteen</u>? 下線部は別の数字でも可</p> <p>&lt;職業など&gt; ・Is he a <u>junior high school</u> student?   <u>an elementary school</u> (小学校)</p> <p>&lt;住んでいるところ&gt; ・Does he live in Japan (America)? ← ・Where does he live? *Where どこに</p> <p>&lt;好きなもの・得意なこと&gt; ・Does he play <u>baseball</u>? ・Does he speak <u>Japanese</u>? ・Does he like <u>dogs</u>? ・What <u>sport</u> does he play? ・What <u>animal</u> does he like? *下線部は他のものでも可</p> <p>STEP UP 「どんな(何の)～が・・・ですか。」とたずねる <b>What+名詞(単数)</b> どんなスポーツが好きですか。 <b>What sport do you like?</b> 何の教科書を勉強しますか。 <b>What subject does he study?</b></p>	<p><b>1 解説</b></p> <p>生徒の質問はそれぞれ <b>生徒1</b> 子どもは何人いるか <b>生徒2</b> Mikeについて <b>生徒3, 4</b> Emilyについて <b>生徒5, 6</b> Mrs. Smithについて たずねています。he やshe の代名詞が誰のことを差しているのかに注意が必要です。</p> <p><b>2</b> 表を完成させるために必要な情報は「年齢・職業など・住んでいるところ・好きなもの・得意なこと」などです。 Davidについてたずねる時には、主語が三人称単数であることに注意しましょう。</p> <div style="border: 1px solid green; padding: 2px; margin: 5px 0;"> <p>★ <b>主語がI, you以外(三人称)で単数</b> 動詞に <b>s</b>または<b>es</b>がつく 疑問文では <b>does</b> を使い動詞は原形 否定文では <b>does not + 動詞(原形)</b> → Unit 6</p> </div> <p>写真の情報から、「野球」「年齢」などが話題にできそうです。他の家族の情報からは、「日本語が上手か」「犬などの動物が好きか」などの質問も考えられます。もちろんそれ以外のことについてたずねてもいいのですが、話の流れに何の関連もない話題についていきなり質問されると、答える方も混乱しますね。</p>

問題を解くために

言語活動のプロセスを解答の手順として示す。

正答例

模範解答を通してより多くの表現に触れ、そこから更に学ぶことができるようにする。

解説

問題の解説は具体的な言語活動について「活用」の視点から行う。  
文法的な解説は教科書単元を示し、具体的な復習への橋渡しをする。

STEP UP

応用的な表現や題材に関連する表現を紹介したり、適切で効果的な英語運用のポイントを示したりする。



(2) 中学校英語科における「活用問題」の利用に当たって

<授業の中で>

○単元のまとめ

単元の最後に「活用問題」を位置付けることで、「活用」を意識した授業展開を取り入れた単元の指導構想を立てることができる。また問題に取り組んだ後には、生徒の取り組み状況や解答状況から、具体的に学習や指導の振り返りを行うことができる。

○単位時間の言語活動のテーマ

「活用問題」を用いて授業を展開することができる。「聞く」、「話す」の言語活動を加えたり、ペアやグループの学習形態で取り組ませたりすることで、総合的な言語活動に発展させることができる。

○既習事項の復習として

「活用問題」を使用し既習事項の復習をさせることができる。場面設定や設問の条件を変えることで、難易度や活用する知識・技能を変えることができる。

<家庭学習で>

○「活用」を家庭学習で

授業の学習内容を別の場面設定や条件の下で活用する課題として、家庭学習で「活用問題」に取り組ませることができる。週末課題や長期休業の課題としても利用することができ、語彙や文法のドリルなどと併用して取り組ませることで、「活用」に習熟してだけでなく、効果的に言語材料の習得も促すことができる。

○授業と連動した家庭学習

「活用問題」を利用することで、授業と家庭学習を連動させることができる。授業で生徒に「活用問題」に取り組ませる前に、必要となる言語材料の練習や参考になる表現の暗記を家庭学習で行わせることができる。また「活用問題」に取り組むことで明らかになった課題に家庭学習で取り組ませることで、知識・技能の習得を促すこともできる。

このように、「活用問題」は様々な場面で利用することができる。教師が問題のねらいを踏まえ生徒の実態等に応じて創意工夫することで、より効果的な利用が期待できる。

#### 4 中学校英語科における「活用問題」の作成に関するまとめ

中学校英語科における「活用問題」の作成について、以下のようにまとめる。

- ・言語活動の充実を図るために必要なキーワード、「4技能の総合的・統合的な育成」、「場面や状況に合った適切な表現の選択」、「互いの気持ちや考えを伝え合う活動」を意識した具体的な言語活動を「活用問題」としてまとめることができた。
- ・思考力・判断力・表現力等を育成するための手立てとして、言語活動のプロセスを問題の構成に反映させることができた。
- ・学習指導要領に追加された言語活動の指導事項を、問題の内容として中心的に扱うことで、本県の課題にも対応可能な「活用問題」を作成することができた。

#### V 研究のまとめ

本研究の目的は、生徒への基礎・基本の定着を支援するために、言語活動を拠り所とし、情報を要約したり、考えを説明したり、論述したりすることを中心に構成した基礎的・基本的な知識・技

能の活用を図ることをねらいとした問題を作成し、提示することであった。

研究を通して、中学校英語科における「活用」のとらえに沿って「活用問題」を作成することができた。

以下に、「活用問題」の利用によって得られる効果について述べ、研究のまとめとする。

○生徒が、授業や家庭学習などで「活用問題」に取り組むことにより、知識・技能を活用することに習熟し、思考力、判断力、表現力等が育成されること。

○教師が、生徒の「活用問題」への取組状況から、基礎的・基本的な知識・技能の習得状況や思考力、判断力、表現力等の育成状況を把握し、授業及び家庭学習等の改善及び支援を行うことができること。

<おわりに>

この研究を進めるにあたり、ご協力いただきました先生方、生徒の皆さんに心からお礼を申し上げます。

#### 【引用文献】

岩手県教育委員会(2008), 『「活用」に関する指導資料』 p. 60

文部科学省(2008), 『中学校学習指導要領解説(平成20年3月)』 pp. 105-106

#### 【参考文献】

岩手県教育委員会(2008), 『「活用」に関する指導資料』

岩手県立総合教育センター(2009), 『知識・技能の活用を図る学習活動に関する指導展開例の作成』

高木展郎(2009), 『各教科等における「言語活動の充実」とは何かーカリキュラム・マネジメントに位置付けたリテラシーの育成ー』, 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編, 三省堂

平田和人 編著(2008), 『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』, 明治図書